美人画研究会の最近の活動報告

第9回2017年1月21日（土）の美人画研究会は、アカデミックタイプの会として研究発表を中心に行いました。この回の企画を担当した畑江さんと交流のある、帝京大学美術史教授の岡部昌幸先生が拓殖大学の会場を手配してくださり、いつもの同好会とは趣の違う「研究会」らしい会となりました。

内容としては、1）浮世絵美人画より江戸美人のファッション(畑江麻里)、2）大衆雑誌の表紙絵における美人画の変化(岩崎達也・帝京大学博士課程)、3）美人画論・英国編Ⅰよりデイヴィッド・パイパー「英国の顔」とノーブルな美人画(岡部昌幸教授)、という3本立ての研究発表をカラフルなスライドを見ながら聞くことができ、多彩な分野から研究された種々の美人画を堪能できました。畑江さんの発表では、華やかに着飾り豪華な簪をさした花魁の美人画と、寛政から幕末期の地味な着物の裏に隠された花柄の襦袢の美しさや格子柄の着物の粋さを表現した江戸モードの美人画との比較が興味深かったです。岩崎さんの発表では、日本のドガと呼ばれた小磯良平氏の作品を多数紹介された後、婦人画報などの大衆紙の表紙絵を描いた猪熊弦一郎氏が日本のマチスと呼ばれたことを紹介してくれました。岡部先生は、顔にこだわる英国人気質と、ノーブルさが感じられるサージェントの絵画などを紹介してくださいました。

その後の懇親会は同じ拓殖大学の展望ラウンジに場所を移して催されましたが、こちらでは岡部先生の所有される額装された小早川清の肉筆浮世絵を鑑賞させていただきました。

◎2月18日（土）　美術館巡り　鏑木清方美術館

立春を過ぎ梅の蕾がほころぶ季節に、明治～昭和初期の日本画の大家で前出の小早川清氏の師匠でもある鏑木清方氏の美術館を見学に行きました。鎌倉駅より賑やかな小町通りを歩き少し脇道に入った住宅街の中に、清方のアトリエだった場所を改造した小さな美術館があります。「物語の中の女性たち」という企画展で、今の東銀座界隈で育った清方の描いた芝居絵を、学芸員さんの説明を聞きながら鑑賞しました。美人画研究会メンバーで日本画家でもある秋元霞翔さんが、清方の描いた歌舞伎についての説明をして下さり、理解が深まりました。

◎4月2日(日)　第10回美人画研究会クリエイティブタイプの会

岩田専太郎美術館にて模写体験の予定です。内容は次回のニューズレター紙面にて報告させていただきます。

（松永　伸子）

訃報　福村晃夫 先生のご逝去を悼む

日本顔学会中部支部支部長でフォーラム顔学20周年記念大会の大会長であられました名古屋大学・中京大学名誉教授、福村晃夫先生が、満92歳を目前に、薬石功なく2016年12月5日に永眠されました。

ここに謹んでお知らせ申し上げますとともに、心から哀悼の意を表します。なお、通夜および葬儀は親族・近親者にて既に執り行われております。

（日本顔学会会長　輿水 大和）

図書紹介

記憶力の脳科学

柿木隆介（著）
ISBN-10:4479795014
ISBN-13:978-4479795018
発売：2015年10月
定価：1,400円（本体）
発行所：大和書房

平成日本髪入門
成人式・七五三・婚礼に使えるアップの原点

新井唯夫（著）
ISBN-10:4906941389
ISBN-13:978-4906941384
発売：2015年10月
定価：6,000円（本体）
発行所：女性モード社

白鳥真太郎写真集　貌・KAO〈2〉
白鳥写真館「これから…」

白鳥真太郎（写真）
ISBN-10:4877384804
ISBN-13:978-4877384807
発売：2016年6月
定価：45,000円（本体）
発行所：日本経済新聞出版社

street style from LONDON
from 1985 to 1996
（STREET 2017年03月号）

Shoichi Aoki（Photo）
発売：2017年2月
定価：3,704円（本体）
発行所：ストリート編集室

編集委員

髙野　ルリ子

中洲　俊信

菅沼　薫

竹原　卓真

米澤　泉

上田　彩子

城戸崎 雅崇（協力）

小杉　健（協力）

発行：日本顔学会©　編集・製作：日本顔学会 J-FACE 編集委員会　日本顔学会事務局
〒100-0003　東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9F　株式会社毎日学術フォーラム内　TEL：03-6267-4550　FAX：03-6267-4555
発行日：2017年4月24日　＊無断転載を禁じます。

J-FACE NEWS LETTER

日本顔学会ニューズレター 63 号
24 APRIL 2017 Vol.63　http://www.jface.jp

Contents

P1. Now the Face
P2. 第41回＆第42回 化粧文化研究者ネットワーク研究会報告／第12回 若手交流会報告
P3. 第52回日本顔学会イブニングセミナー報告
P4. 美人画研究会の最近の活動報告／訃報「福村晃夫先生のご逝去を悼む」／図書紹介

now the face 第47回　今、を感じさせる KAO の人物を紹介する

稲垣　涼子 さん　Ryoko Inagaki
久保　友香 さん　Yuka Kubo

［プロフィール］
【左】稲垣涼子さん／大阪教育大学大学院 教育学研究科 数理情報コース修士課程修了。フリュー株式会社にてプリントシール機の商品企画に約12年携わる。メインプランナーとして、「姫と小悪魔」（2006年）、「美人プレミアム」（2007年）などヒット商品を多数企画。企画部部長を経て、現在は「GIRLS'TREND 研究所」所長として女子高生・女子大生の動向について研究を続けており、フリーマガジン「GIRLS'TREND」の編集長も務める。
【右】久保友香さん／東京大学大学院 新領域創成科学研究科 人間環境学専攻 博士課程修了。博士（環境学）。東京大学先端科学技術研究センター特任助教、東京工科大学メディア学部講師などを経て、現在、東京大学大学院 情報理工学系研究科 特任研究員。「女の子の外見の“加工”と“公開”を支援するコミュニケーション技術（＝シンデレラテクノロジー）」をテーマに研究活動。

最近、女子学生を中心に広まっている“盛る”という文化。そのきっかけにもなったプリントシール機（以下、プリ機）の企画開発に携わる稲垣さんと、工学的な面から“盛る”を研究する久保さんに話を伺いました。女子学生を研究対象にしているお二人の女子学生時代、そして、共同研究に至るまでの秘話を紹介します。

■対照的な学生時代

三姉妹の末っ子という稲垣さんは、幼い頃からお姉様の影響でお化粧や可愛いものに興味があったそうです。高校では、部活そっちのけで遊んでいたとのこと。ルーズソックスを履き、プリ機で遊ぶのはもちろん、毎日友人とPARCOに行ったりカラオケしたり。まさに、行動としては典型的なギャル。大学では、飲みつぶれた部員の介護役を任されるなど（救急車に同乗したことも！）、周囲からの信頼も厚かったようです。

一方で、久保さん。幼少期は走るのも食べるのも遅く、「何もかもできない」と劣等感を抱いていたとのこと。そんな中、たまたま受けた塾の試験で好成績だったことが自信に。“モノサシ”に苦しめられたからこそ、モノサシが変われば自分の価値も大きく変わるのだと気付いたそうです。以降は理系女子の道を一直線。高校時代はひたすら数学にいそしみ、大学ではエネルギー工学を専攻。人と関わるのは苦手だったようです。

こんな対照的な二人の女子学生には、今の仕事につながる転機がありました。

■稲垣さんの転機

稲垣さんは、誰に言っても伝わる商品のモノづくりに携わりたいとの思いから、プリ機を手掛ける現在の会社に技術者として入社。実は、稲垣さんも理系女子なのです。開発は楽しかったそうですが、当時社内で数少ない女性だったこともあり、次第に企画も手伝うように。ここで、学生時代にプリ機ユーザだった経験が活きました。技術をメインに押し出そうとするこれまでの方針に疑問を持ち、ニーズ調査を徹底したそうです。パステル／ビビッドというコースで色分けすることで写りをよく見せるという、技術的には進化がない商品企画を提案した際は、社内から反対意見をもらうことも。そんなときは、「企画の良さを理解して味方になってくれる人を見つけて助けてもらった」とのこと。さすが、周りを巻き込むコミュニケーションにも長けています。

今ではプリ機のシェア７割を占めるフリュー株式会社ですが、かつては低迷状態で、「女子高生にアンケートをしたら、誰の回答にも上位３位以内に弊社のプリ機が入ることはなかった」とのこと。そんな状況で、稲垣さんが企画したプリ機がアンケートで１位を独占したときは嬉しくて思わず出張先から上司に電話してしまったそうです。現在は優れたセンスと持ち前の信頼感で、50名以上のメンバーを先導する立場となっています。

■久保さんの転機

大学院に進学した久保さんには、もう一人の自分が出てきました。それは、“文化好き”の自分。歌舞伎や仁侠映画などを親が好んで見ていたこともあり、幼い頃から日本の大衆文化に馴染みがあったとのこと。次第に、研究の興味が自然現象から文化へと移っていきました。数学を使って文化を形式知化できないかと、独自の路線を開拓し始めました。博士課程では、浮世絵や美人画の構図の誇張方法を適用した画像処理について研究し、学会でも高く評価されています。

順調な研究生活かと思いきや、実は、悩みを抱えていたそうです。過去の文化にとどまらず、未来に向けた文化を研究対象にできないかと。そんな折、ギャルを対象としたファッション雑誌が目に留まりました。そこに載っていたギャル達のメイクは、一見すると同じような顔をしつつもそれぞれ自分らしさを出そうとする不思議な美的基準があったのです。自分なりのモノサシをかざして堂々と振る舞うギャル達をみて、久保さんは、浮世絵や歌舞伎に通じる“反逆心”を感じたとのこと。これぞ未来を切り開く文化だと感じ、たちまちギャルの虜になりました。「これまでモノサシで苦しめられた分、モノサシ（の研究）で仕返ししてやれ」と、久保さんの反逆心がうずきます。

■そしてコラボへ

とはいえ、相変わらずコミュニケーションが苦手で、家にこもりがちだった久保さん。ただ、このときばかりは思い切ったようで、自らフリューの門をたたき、理系的な理解もあった稲垣さんと意気投合。女子学生のトレンドについての知見・経験と工学との融合で“盛り”を研究し、各種メディアに取り上げられるまでになりました。「小さい頃から人と一緒に取り組むのが苦手だった」という久保さん。今では、仲間ができたのが本当に嬉しいとのこと。一歩踏み出す勇気がこれだけの可能性に繋がるのですね。

以上、対照的な二人の女子学生が共同研究に至るまでのシンデレラストーリーをお届けしました。研究内容は顔学会の学術大会でも報告されているのでご確認ください。今後のお二人のご活躍も楽しみです！なお、文章表現に多少の“盛り”がありましたが、ご容赦ください。

（文：中洲 俊信、撮影：福富 大介）

第41回&第42回 化粧文化研究者ネットワーク研究会報告

この研究会は年４回、東京と大阪で交互に開催しています。今回は12月と３月に行った研究会の報告です。

第41回「浮遊する美人～美人とは何か～」

講師：城戸崎　雅崇さん
日時：2016年12月17日（土）14:00～17:00
場所：資生堂FSビル（東京）

城戸崎氏の約10年間にわたる研究成果が多岐にわたり紹介された。氏は顔学会や浮世絵学会に入会した頃から「美人論」の原稿を書き溜めていたそうだ。顔学会論文誌にも「描かれた平安美人（Vol.2)」、「粋な美人とはどんな顔？（Vol.4)」の発表がある。

講演は「美人は難問である」というテーマから始まった。クレオパトラからマリリン・モンローまで古今東西、美人の話題は多いものの「なぜ美人なのか」の本質についての議論は少ないという。内容は「美人とは何か」に切り込んでいく。美人の識別は生得的か後天的か、美人を数値的に記述できるか、グローバル時代の美人の基準はあるか、美人はどう描かれたか、言葉ではどう表現されるか。豊富な絵や写真、文献ともに、美人を数学的に分析する困難さや、美の基準は時代や文化によって共通性もある一方、変化すること、グローバル化時代は美の基準幅を広げたこと、美人画には作家の理想が反映されるといった説明が展開され、まさに「浮遊する美人」の視座を得た時間であった。参加者からは美人に対する持論や、いつから美人を意識するようになったかといった体験談も飛び出す、ホットな研究会だった。

第42回「文化心理学から捉える化粧行為」

講師：木戸　彩恵さん
日時：2017年3月3日（金）14:00～17:00
場所：大阪樟蔭女子大学（大阪）

文化心理学は、記号を媒介とし、人の心理過程を扱う学問領域だそうだ。木戸さんはこの記号に「化粧」を当てはめ、その価値や意味を、社会・文化的文脈に基づいて捉える研究の第一人者だ。

木戸さんはナラティヴ・アプローチを重視している。女性たちに化粧についてインタビューをすると、必ず化粧の意味づけを人生や生活を含むライフ・ストーリーとして語るためだ。このアプローチによって、化粧行為に影響する要因や、生涯発達の視点での化粧の意味づけを研究された。たとえば、化粧が日常化する／しないにおいては、他者からの評価や社会規範との関係とともに、化粧の価値、意味に対する自己の気づきや問い直しが影響することを抽出した。参加者は、化粧と心理、社会との関係性に興味が尽きず、活発な議論が交わされた。

今後は、スキンケア、ベースメイク、ポイントメイクといった化粧のプロセスと、場面や人といった宛先との関連を検討し、さらに化粧の意味、価値を深めていきたいという。YouTubeメイクアップ動画の研究や、化粧品被害の研究にも取り組みを広げているそうだ。今後の展開がますます楽しみだ。

【お知らせ】次回研究会は東京にて7/1、伊勢半「紅ミュージアム」の見学を予定しています。奮ってご参加ください。

（高野　ルリ子）

第12回 若手交流会報告

2016年12月18日(日)　東京大学本郷キャンパス　図書館棟西3階大会議室

日本顔学会公認サークルの「若手交流会」は、東京大学本郷校舎にて第12回が開催されました。参加者は初参加の8名をお迎えし合計24名でした。最初に創設5年目を迎えた若手交流会の紹介がなされました。2016年は有志メンバーでの日本顔学会関西支部準備委員会研究会における発表や運営支援、大阪あべのハルカスでのワークショップ開催、また他学会との連携をはかるなど顔学を広く伝える活動ができて充実した１年となりました。

続いては、株式会社空気を読むを科学する研究所の清水建二さんが「全ては顔に書いてある!? ―微表情から察する感情と認知― 」と題して講演してくださいました。微表情とは、抑制された感情が無意識のうちに瞬間的に表れては消え去る微細な顔の動きのことです。まず様々な動画から微表情の実例を体感しました。そして、「話し相手の顔に『熟考』の微表情が浮かんだら？」「食事中のお客様の顔に『嫌悪』の微表情を見つけたら？」「自分の企画が『軽蔑』の微表情とともに拒絶されたら？」を事例に、微表情に気づいた時の適切なリアクションを考えました。いかに相手の抑制された感情をサポートするか、感情の流れを円滑にするかという目的に沿い様々な感情への対処法をディスカッションしました。最後に表情分析の未来についてお聞きし、表情・微表情を自動検出できるＡＩの登場が私達のコミュニケーションをどう変えるのか考えてほしいと清水さんより宿題が提出されました。微表情が織りなす多彩な感情世界の彩りと未来について知ることができ有意義な時間となりました。

最後の活動報告のパートでは、ヒューマンインタフェースシンポジウム2016にて異分野若手連携として開催された「真剣WAKATEしゃべり場！」のワークショップの内容が紹介されました。そして「フォーラム顔学2016」でのポスター発表、ロゴマーク展示、口頭発表、懇親会での「若手の野望」発表の様子が若手交流会のFacebookページを投影して紹介されました。続く報告は、若手交流会ロゴマーク完成までの道のりについてでした。約1年をかけて遂に完成となり、インパクトのあるフライヤーと名刺に続いてロゴマークがこれからの活動に弾みをつけてくれることと思います。顔学の未来に向けてご一緒に活動してくださる皆様のご参加を心よりお待ちしています。

（牛山　園子）

第52回 日本顔学会イブニングセミナー報告

■第10回顔学講座

「メディアとしての顔 ―顔は何を表象するのか？―」

新春恒例の原島先生の顔学講座は、「現代はメディアの時代となり『顔』が氾濫している。」というお話で始まりました。『顔』（括弧つきの顔）とは、「顔らしきもの」です。先生に「人が正面にいて目が合ったら緊張するはずだが、TVの中の顔はなぜ平気なのか？」と問いかけられ、目から鱗が落ちる思いでした。直接向き合ってもTVを通しても、顔に変わりはないと思っていたのです。確かにメディア中の顔に見つめられても、自分の顔や恰好が気になることはありません（その人に特別な感情を抱いている場合は別かもしれませんが）。自分を見ていない顔は『顔』であって顔ではない。本来、顔とは双方向のコミュニケーションを前提として存在しているものだったのです。また、実世界であっても自分に関心が向けられていない顔は『顔』になり得ると先生は続けます。電車の中で化粧をしている人は、まわりの顔をメディアの中の顔のように感じ、「見られている」とは思っていないのではないかと。

人と人とをつなぐはずのメディアは、むしろ人と人との関係を希薄化したのかもしれません。原島先生は、この顔を見せない「匿顔（とくがん）」のコミュニケーション社会を快適に生きるようになった人たちのことを「線人類」と呼びます。先生は、今から25年以上も前に、コミュニケーションの形態から人を「面人類、線人類、点人類」と分類しました。現代人はもともと、face to faceで言葉や顔の表情で豊かなコミュニケーションを行う「面人類」。「面」を2次元とすると、先に登場した「線人類」は1次元。かつては電話線、今は正に「LINE」で代表されるメディアを通じてコミュニケーションする現代人のことです。そして、行きつく先はゼロ次元の「点人類」。人ではなくゲーム機やPCなどのメディアそのものとコミュニケーションをする人たちが生まれています。では、残る3次元は何でしょうか。原島先生はこれを「体人類」と名付けています。互いに体で触れ合うプリミティブなコミュニケーションが得意な人たち。哺乳類をはじめとした動物のコミュニケーションの基本形です。更に先生は、30年近く前にアニメやビデオに囲まれた「点人類」が引き起こした凶悪犯罪を例に、「点人類」が「体人類」に戻ってしまう可能性にも言及されました。

セミナー最後のディスカッションでは、顔と『顔』との違いについても話題となりました。顔が自分を見ているか、関心を向けているかどうかという視点に始まり、素顔とよそ行きの顔、生きているかどうか、そして自分の相手への関心の度合いにもよるという考え方など、セミナー終了時間まで議論は尽きず、非常に印象深いセミナーとなりました。

（今井　健雄）